

「戦争を知らない世代」(2026. 8. 16)

その世代が皆絶えて先祖のもとに集められると、その後、主を知らず、
主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った。(士師記 2:10)

ヌンの子ヨシュアは110歳の生涯を閉じたが、主の御業を体験した長老たちが存命中は、イスラエルは12部族連合として主に仕えた。しかし、上掲のみ言葉のように、御業を知らない別の世代が興ってくると、彼らは主を忘れ、バアルとアシュラに仕えた。士師記は記録している。ここを読み、ガクッとするのは私だけではないだろう。約束の地で主に仕えよと熱情を込めて訴えたモーセとヨシュア。彼らに対し、私達は主に仕えますと固く約束した民ではなかったか。主の御業の語り部がいなくなった時、御業を知らない世代は主への畏れと感謝が失われ、異教の神に誘惑されたのだろうか。

8月9日は長崎に原爆が投下された日である。1945年末までの死者数は7万4千人という。「焼き場に立つ少年」という写真がある。アメリカ占領軍のカメラマン、ジョセフ・オダネル氏が原爆後の長崎で撮影したものである。彼はこの写真についてこのように説明している。「・・・白いマスクをつけた男たちが彼のもとへ歩み寄り、静かに赤ん坊を縛っていたロープを外し始めた。その時、赤ちゃんはすでに死んでいるのを見ました。男たちは遺体を手と足を持ち、火の上に置いた。少年は動かずにまっすぐ立ち、炎を見つめていた。彼は血で光るほど下唇を噛んでいた。炎は太陽が沈むように低く燃えていた。少年は振り返り、静かに歩き去った。」やり場のない悲しみが伝わってきます。



その後、日本はこの廃墟の中から、二度と戦争はしないと固く決意した。そして、軍拡の蟻地獄から抜け出すためには、まず日本が先駆けて武力による威嚇や行使を放棄し、真の平和のために汗する国になると悲愴なる誓いをしたのだった。あれから80年になろうとしている。イスラエルの民は、主の御業を知らない世代が興り、モーセやヨシュアの前で固く結んだ約束を忘れた。日本も戦争を知らない世代が多くなってきた。昔のイスラエルの誘惑に陥らないよう、いつもこの誓いに立ち返るよう祈っていきたい。